

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1290100195		
法人名	(有)暮らしの里		
事業所名	グループホーム 暮らしの里 さくら苑		
所在地	千葉市中央区都町1078-3		
自己評価作成日	平成26年10月20日	評価結果市町村受理日	平成26年1月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/12/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人VAICコミュニティケア研究所
所在地	千葉県千葉市稲毛区園生町1107-7
訪問調査日	平成26年11月11日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

暖かみのある もう一つの我が家を理念とし、個々にその人らしく生活出来るように個性を尊重しながら生き活きと生活されている。入居者の方からもとても良い所と言う言葉も頂いており、家族の方も入居後状態も安定して落ち着いて生活している姿をみて安心して下さっている。ホーム作りにおいても行事等行う際、スタッフ中心でなく入居者の方からの意見等も踏まえて一緒に考えて、共に作り上げて行く様に心がけている。スタッフも明るく入居者の方々が大好きで、常に笑いが絶えない様楽しく仕事ができ、その関わりの中から入居者の方の出来る・出来ないの能力を見極め、有存機能を上手く生かしていける様な支援を心がけ対応している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

笑い声の多いホームである。経験豊かな職員と新しい介護の視点をもった若い職員が協働して、利用者を支えている。モニタリングは個別支援計画の目標や支援内容を意識して、全職員で実施している。利用者の健康管理及び服薬管理などについては、オーナーである医師とホームとの意思疎通が図られており、家族の協力も得て、最善の支援に努めている。また、利用者が地域で自分らしく生活することを専門性をもって支援していこうとしており、地域との関係性づくりも大切にしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	温かみのある、もう一つの我が家を理念とし、管理者、全職員が共に入居者の方の個性を把握し家族のように接する事で入居者一人一人が家庭的で穏やかにホームと地域の中で過ごせるようにしている。	管理者を中心に「温かみのある、もう一つの我が家」の実現に向けて利用者一人ひとりに合わせた個性を高めた支援に向けて職員は一貫性のある介護の実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	市街地の中心地にありながら、環境が良くご近所の皆様には、挨拶をしながらのお散歩に出かける事が多く、地域の皆様も気軽に声を掛けて下さる。ホームの行事にも参加していただいている。	近隣住民と日常の挨拶やかかわりを通して良好な関係を構築している。利用者へ「安全と安心」をもたらすために、地域の中で暮らしていることを感じてもらえるような機会を日常的につくるようにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ご近所の皆様と、可能な限りで会話を実践しホームは清潔で明るく、認知症の皆さんを理解して頂きながら「楽しい家である」事をお話し、気軽にホームへ立ち寄って頂くようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	第七回目を実施。 自治会長、民選委員、利用者家族への現況報告、活動報告を行い、質問や意見を募り相互理解を行えるよう心がけている。	運営推進会議は計画的に実施し、積極的な意見交換がなされている。自治会長や民生委員、利用者家族に向けて現況報告や活動報告などを行い、ホームの実情と今後の展開を共有している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	事務的な提出や質問等がある時は、いち早く連絡をさせて頂き、市の担当者からも色々な情報を頂けるようになっていく。	法人代表が管理者を務めているために、暮らしの里3ホーム全体について市町村と連絡を密にとっている。必要な情報収集や情報交換を行い今後の取り組みに活かしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	正面玄関はオートロック機能で閉まっているが、入居者が出入りする際は、職員が直ちに解放できる様に周知徹底をしている。その他の拘束は、利用者の安全確保の為、必要な場合に限りご家族の同意を得て行う場合もあるが随時見直しもしている。	利用者が安全と安心を実感できる日常を暮らせるように職員は見守りや声かけで対応するようにしている。正面玄関のオートロックについては、根拠を明確にし、利用者及び家族の理解、納得を得ている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員が研修に参加し月例ミーティングで勉強会を開き、スタッフが虐待とはどのようなものかを改めて共有し虐待防止に努めている。		

【評価機関】

特定非営利活動法人VAICコミュニティケア研究所

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ご家族や入居者の方からの相談については、その都度、管理者が相談に応じて対応している。 また千葉市介護相談員制度も利用を始めた。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	見学时にホームの契約の流れを説明し疑問点を伺い、入居時には契約書等を共に確認しながら、再度、疑問点や不安を確認し理解して頂いた上で最終的に署名捺印をして頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見・相談・不満・苦情は今後の運営に反映できるように率直に伝える様に入居契約時に説明している。契約時には、契約書の中に、苦情申し立ての連絡先がある事も説明している。 苦情・相談ノート 意見箱作成	職員は利用者の意見や要望を把握するために何でも話すことができる関係、状況作りに努めている。家族からは来訪時等に直接意見を聞き、できることやできないことを分かりやすく伝え、直ぐに対応するようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員が生きがいを持って働けるように、代表者・管理者は意見及び提案を聞き、入居者に危険、不利益が生じないものは速やかに反映している。月例ミーティングにて意見を聞き反映させている。	利用者一人ひとりに合わせた支援を実践するため、必要な情報共有ができる仕組みがあり、手順や役割が決めている。月次に行われるミーティングでは研修も実施し、基本事項の確認を行うとともに、意見交換の場にもなっている。	職員の経験や知識に合わせた計画的人材育成を通して、意思疎通を図ることが更なる組織の成長には効果的と思われる。また、個別の意見が抽出しやすい仕組みづくりが期待される。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	向上心を常に持ち誠実に努める職員については、担当分野を決め、昇給もあり。入居者の方と楽しみや喜びを共有できるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	参加できる研修に関しては、希望者を募り研修の申込を、内外の研修参加を促している。研修後は必ず定例ミーティングを通して発表と勉強会を行い職員で共有できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	代表者、管理者は同業者との交流はあるが、職員個々の同業者交流は現時点ではない。 今後、研修に参加する事で他職種との交流が生まれケアの質の向上にも繋がると思われる。		

【評価機関】

特定非営利活動法人VAICコミュニティケア研究所

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居希望者は、必ずホームに見学に来訪して頂き、ホーム内の案内、説明と介護方針を伝える。 お試し入居やホーム行事がある時は、参加を促して馴染みを持って頂く。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	今までの生活歴、悩みなどを伺いながら、ホームでの生活をどのように対応していくかを双方で話し合っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	医療の必要性や本人とご家族の希望を確認し、個人にあったサービスをどのように進めていくか双方で意見を出し合っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	スタッフは常に入居者の方と関わり一人一人のその日の状態を把握し、共に充実した日々を送れるように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族がいつでも気軽にホームへ来訪出来るように「アットホーム」「もう一つの実家」のような環境でサービスを行い信頼関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	個室にはご自身の大切にしていた馴染みのものを持参して頂き、ご家族友人も気軽に来訪して頂いたり電話、お手紙、年賀状等も活用している。	利用者が大切に思っている関係性や馴染みの場所の把握に努め、日々の関わりの中で話題にするなどの取り組みをしている。また電話をかけたたり年賀状を出す支援もしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中は、居室に閉じこもる事なく、ホールで過ごしやすい環境を作り、職員が家族となり接しながら入居者同士が自由に行動したり、気軽に会話が進むようにしている。		

【評価機関】

特定非営利活動法人VAICコミュニティケア研究所

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご家族がホームに対して相談、希望があればその都度対応させて頂いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人が希望、意向を伝えられる方には、話し合いを設けたり、困難な方には毎日の状態を把握しながら少しでも安心して生活をして頂けるようにしている。	家族が来訪した際に、利用者の思いについて聞いたり、日々のケアの中で職員がコミュニケーションを取る際に把握に努め、職員間で共有するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前や入居時に今までの生活歴をご家族から聞き、介護サービスについてはサービス提供事業者から経過報告を頂き、把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前後の生活状況や日々の生活の中で個性を把握し個々の能力を知り、なにが出来るかを見出せるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護者の関わりの中で必要な意見を出して行き、介護計画を作成するように努めていく。家族との直接会話により双方の思いや希望を話し合いを持つ事で、感謝をして頂いている。	日頃から家族や利用者本人の意向の把握に努めており、それを踏まえて職員の意見を聞きながら介護計画を作成している。また、定期的なモニタリングを実施している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々、個々の経過観察記録を記載し、提出の中に実践・経過・気づきなどがあり、皆がそれを共有する事で、計画サービスに反映するように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人とご家族の希望に出来る限り応えられるようにし、利用者に対しては日々の変化を見極めながら支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	散歩やホームの外で活動する事により、地域の皆様へ知って頂き、声をかけて頂きやすい環境になるよう日々心がけている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	提携医療機関により定期的な在宅診療と必要に応じて受診。主治医が提携医療機関でない場合とホーム提携医療機関以外の受診は、基本的にご家族同行による受診としている。	協力医療機関が定期的に訪問し、利用者の健康管理をしている。また、診断書は家族等に郵送している。専門医やかかりつけ医等については家族の協力で受診できるようにしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	現在、看護の必要な入居者はいない。ホームには専任の看護師はいなく、訪問看護との契約もしていない。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	ホームに戻る時期や状況をご家族や病院の相談員と連絡を密にとりながら退院後の対応に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居者の方の変化や状況を見ながらご家族と今後についてどのような対応をしていくかを相談しあう。ご本人に対しては性格や認知症の進行により確認できない方もいる。	利用者が重度化してきた場合は段階的に家族や医師と話し合いながら支援方法を決めている。今のところ看取りの希望はないが、利用者や家族の思いを叶えられるような支援に努めたいと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	食事等での誤嚥には定期的な対処方を訓練しているが、多方面に関しては必ず、管理者や医師に確認の上、指示に基づき速やかに対応している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災避難訓練に関しては、定期的な訓練。消防局が可能であれば訓練立会いの協力をお願いする事になっている。	年2回の避難訓練を実施し、そのうちの1回は消防局員立ち会いで行っている。夜間想定訓練も行い、できる限り全職員が参加できるようにし、地域住民にも参加してもらえるように日程調整をしている。	様々な場面想定と、繰り返しの訓練がスムーズな避難につながると思われる。火災だけでなく、自然災害を想定した訓練を行う事も期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者の方一人一人を尊重し、プライバシーの保護に努めている。	職員は、自分が嫌だと感じることは、利用者にとっても嫌な事であると認識し、利用者にも声をかける時、居室に入る時等、誇りやプライバシーを損ねない対応に心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者の方が意思を伝えてきた時には、本人の自己決定を尊重して判断するが、ホーム側で判断する事もある。帰宅願望に関しては、希望に添えない場合がある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ホーム全体の決まり事(体操、レク、掃除、入浴、食事時間)は、日々の生活リズムの為に皆で行うが、その他においては、個人の希望を優先する。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居者の方の身だしなみ等は、個々で異なる為、本人の意思を交えながらお化粧、洋服をコーディネートするように心がけている。ご自分で出来ない方は、介護者によって身だしなみを整えさせて頂く。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	包丁など刃物を使う機会は少ないが、可能な方のみお願いしている。後片付けにおいても分担表を作成し参加。エプロンを着用をお願いしている。	食事を楽しむ取組みとして利用者一人ひとりの状況に合わせた食事の準備、後片づけ等の役割を持ってもらっている。食材の購入は利用者と一緒にいく事もある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者の方を把握し、水分制限がある方に関しては医師の指示により必要に応じて摂取量、水分補給に心がける。またカウンターにポットを置き、自由に補給できるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、必ず口腔ケアを実行している。間食時は本人の意思に任せる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し声かけ・誘導をしている。個々に見合ったオムツ等の使用をしている	個別に排泄のタイミングを職員間で共有している。利用者が移動する際にさりげなくトイレに誘導するなど利用者の表情や動きを観察して、排泄の自立に向けて支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事は栄養士のメニューに基づき作り、便秘のある方は医師に相談して薬の処方も利用。水分補給量確認や運動できる方は動く事で腸の活動を促すように心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の日時は、ホームで決め、週2回の入浴日あり。個別に対応しながら入浴して頂いている。必要に応じて週2回以上になる事も有り。	できる限り利用者の意向を尊重し、個別対応で入浴支援をしているので、入浴時は職員と利用者がコミュニケーションを取る機会にもなっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は、しっかりと活動している為、ほとんどの方は良眠されている。認知症の進行等で深夜に覚醒してしまう方はその都度対応。常に覚醒してしまう場合は、医師と家族に相談し薬の処方も行方。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の変更や作用により屯用の薬がある場合は、薬の作用と用途を必ず申し送ると同時に入居者の生活記録ノートに記載し服薬後の変化についても詳細に記録するようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の生活歴や有存機能を生かし、ホーム内での役割や楽しみを見出すように務めている。現在まで行っている事は、継続し支援し喜びに繋がるようにする。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	入居者の方の精神状態に応じての対応としている。殆どの方は買物、お散歩を楽しんでいる。	季節に合わせたお花見や、公園散歩、馴染みの美容室に行くなど利用者の状況に合わせた外出支援を行っている。また、家族と一緒に旅行に行く利用者もいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人での金銭管理は行っていないが、買い物の際にレジでの支払いは利用者の方の能力に応じて行って頂いている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者からの電話は必要に応じてのみ行っているが、ご家族、親戚、知人からの連絡時はホームへの連絡であっても本人に取り次ぐようにしている。また希望に応じて手紙のやりとりを行っている方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を表現できるように、入居者の方と共に飾り付けを作成している。お花、植物、畑等は、職員と入居者の皆さんで楽しんでいる。	利用者と一緒に庭に花を植えたり、リビングの広い窓から森の眺めて季節の移り変わりを楽しんでいる。リビングも各居室もよく日が入るように設計されており、明るく居心地がよい空間である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールは家庭的なリビング風である。入居者同士で気の合う方は会話楽しんで頂いている。 DVD鑑賞会も行い気の合う仲間同士で集いの場になるように心がけている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は入居者に馴染みのある物や、大切な物を持参して頂くようにしている。 長年利用した筆筒等が居室にあると心が落ち着くようである。	利用者が長年使い慣れた、筆筒や椅子、仏壇などを居室に持ち込んでおり、できる限りこれまでの生活を継続して、安心して居心地良く過ごせるように、家族と話し合いながら支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者の方との関わりの中で状況を知り、個々の有存機能を生かして、生活ができるように自立支援を行っている。		